

関西農業史研究会報

—No5-1979.6.9—

第18回例会・1979.5.12 田中耕司氏 「ビルマにおける乾季稲作の諸相」

第18回例会は、8名の参加で上記の要綱が開かれた。約一時間の報告のあと、ビルマやインドの農業の様子がスライドで紹介された。以下はその時の報告要旨である。

(1)はじめに

昭和53年度文部省科学研究費の補助による「熱帯アジアにおける野生イネの分布と栽培イネの生態型分布の調査」(代表者:渡部忠世氏)の隊員として、1978年12月から79年2月末までインドのアッサム州とビルマを訪問する機会を得た。調査期間はいずれの地域でもモンスーンの乾季にあたっていたが、各地で乾季の稲作を実見できた。ビルマの農業については従来から報告例が少なかったため、ここではビルマの乾季稲作の一端を紹介する。

ビルマでの調査期間は1月13日から2月25日までで、この間、



マニダレ一周辺、シマ州のタウンジー周辺、ニッタン川流域、
モニ州のモールメン周辺、アラカン州のアキャブ周辺、およびイ
ラワツデルタのボーガレイ、バセインなどで調査を実施した。こ
れらの地域における稲作立地とこれら立地に適応した乾季稲作の
種々のタイプについて事例的に報告する。

(2) 乾季の気候条件と乾季稲作

年間降雨量2500~4500mmとなるビルマ南部および沿岸地域であ
っても、乾季(11~4月)には降雨量100mm以下、降雨日数5日
前後と、極度の乾燥を呈するようになる。年間降雨量1000mm前後
のビルマ中央部寡雨地帯では、上記地域よりさらに少ない降雨量、
降雨日数となり、あたかも砂漠のごとき景観を呈することも少な
くない。従って、乾季における稲作には元水稲作はありえず、灌
漑施設による水の供給、あるいは地理的立地による水の確保が不
可欠となる。換言すれば、そういう立地でなければ乾季稲作は成
立しえないわけである。

(3) 種々の立地と乾季稲作

調査中に観察された乾季の稲作立地を整理すると以下のよう
である。これらはいずれも、乾季においても水を確保できる立地に
専らしているか、あるいは灌漑施設を備えている地域である。

① 灌漑稲作地帯—重カ灌漑(水路)による水の供給(マニダレ
—周辺部)

② イラワヅデルタ地帯—動力ポンプによる水の供給(ボー
ガレー, バセイン周辺)

③ 沿海低平地帯—潮汐の干満差による水の供給(モニ州)

④ カイン・ランド—雨季の河川増水による水の供給(サガ
イン, マグダ管区のイラワヅ, チンド
ウニ流域)

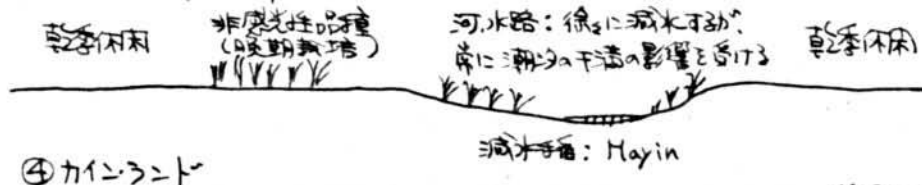
⑤ インレ—湖畔低湿地—湖面からの重力差による水の供給
(ニャニ州, ニャウニシエ周辺)

①は古くから開発された稲作地帯で、乾季・雨季を問わず、水路灌漑によるかなり集約的な稲作が行なわれている。いっぽう、②のデルタ地帯での乾季稲作は比較的最近に導入されたものである。デルタは雨期には河川の増水と降雨によって一面が水田と化すものの、乾季においては田面はまったく乾燥し、稲作は一部の滞水地を除いては実施できていなかった。デルタにおける乾季稲作が可能となったのは、動力ポンプによる河川からの揚水灌漑が可能となってからである。デルタの乾季稲作では High Yielding Variety が導入され、徐々に稲作の近代化がはかられつつあるが、その作付面積はまだわずかである。(水田面積に占める乾季の稲作付面積比率は、ボーガレーで0.2%、バセイン(西部)で0.3%にすぎない)

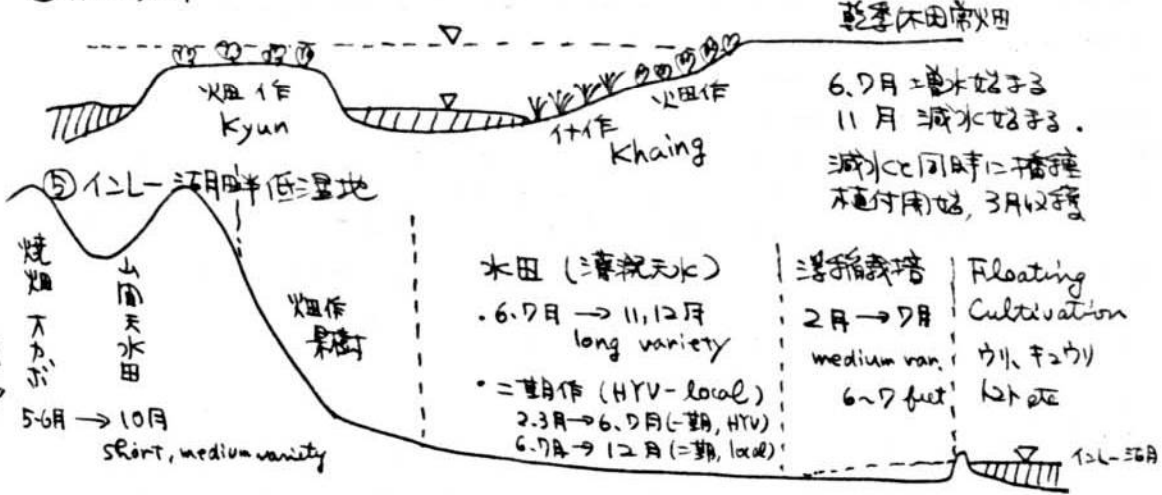
③~⑤は、いずれも特異的な立地を生かして乾季稲作を行なっている地域である。附図に示したように、その稲作はまった

く地域に固有のものであるが、微妙な地形の変化(わずかの標高差)を利用して、立地を最大限に生かし、水稲を作付しようとする点で共通している。いわば、地域の立地に適応した伝統的な乾季稲作であろう。これらの地域で利用される品種はいずれも固有の立地に適応した在来種である。とくに③の地域での耐塩性品種、⑤の地域での耐深水性品種の存在などは、品種生態型の面からも興味あるものである。

↑付 ③ 沿海低平地帯 (モロ州の場合)



④ カインラント



(4)おわりに

調査期間中に見聞できた地域は、広大なビルマのほんのわずかの地域にあすぎなかつたが、立地を異にすも乾季稲作の成立についてい
エテが興味をおぼえた点も多い。乾季稲作は、雨季のそれに比べて
面積的にはほとんど問題にならないものの、この時期にも最大限に
耕地を利用しようとする農民の姿勢、また、立地に適応した技術
駆使しようとする伝統に教えられることも多かった。いずれ、これ
らの点についても詳しく紹介したい。(田中氏)